魔王に召喚された勇者の話

ランプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王に召喚された勇者の話

【Ｎコード】
Ｎ２９１７Ｕ

【作者名】
ランプ

【あらすじ】
百合川（ゆりかわ）　唯（ゆい）は、勇者として召喚された。
それ自体は別段珍しくもない物語ではあるが、彼女を召喚したのは王様でも賢者でもなく、世界を滅ぼそうとする魔王だった。
魔王は言った。
「世界を救って欲しい」
勇者は言う。
「あなたは魔王でしょう？」
魔王は願った。

「世界を救って欲しい」
勇者は思う。
「魔王は何を考えているの？」
世界を滅ぼす魔王が、世界を救う勇者を召喚する、少し変わった物語。

序章

どれだけの時間を僕はこの世界ですごしただろう
どれだけの時間を僕はこの世界に奪われただろう
どれだけの時間を僕はこの世界で苦しみ続けただろう
果てを意識しなくなったのはいつからだろう
いつか終わる――その幻想を抱く事ができなくなってから、いったいどれほどの時間が流れたか
喜びも悲しみも怒りも憎しみも
すべてが枯れ果て、空虚になってから僕はいったいどれだけ心が動いただろう
世界から目を背け、世界から逃げようとして
そして世界に捕らえられてから僕は――

序章（後書き）

ちょっとひねった王道を書いていこうと思います。最後までお付き合いしてくだされば幸いです。

◇1

百合川（ゆりかわ）　唯（ゆい）は昔から小説が好きだった。

赤川次郎や星新一の本は勿論の事、司馬遼太郎や夏目漱石も読んだ。さらには日本の本だけに飽き足らず外国人作家の作品にも手を伸ばした。

だが、そんな読書家な唯であるが、彼女は純文学以外の本も好きであった。俗に言う、ライトノベルである。

中でも彼女が好んだのは所謂トリップ物。異世界に召喚された主人公が、あれやこれやと世界を救い、愛する人と末永く暮らしたりする物語である。

彼女は異世界という物に憧れていた。今ある平凡な現実が退屈で退屈で仕方がなかった。

電車の中でポケ～としている時間は大抵、自分が主人公のトリップ物が、頭の中で展開されている。そんな、少々妄想癖のある、女子高生なのである。

「う～ん……」

茹だる様な夏のある日、本来であれば夏休みで休校しているはずの学校に、唯は所属している読書同好会に出席するため向かっていた。

本来であれば制服を着て登校すべきなのであるが、どうせ学校にいる時間など極々短時間で、すぐにクーラーの効いている市立図書館やファミリーレストランに行く事になるだろう事から、彼女は白地のTシャツに、ジーパンという井出達だった。

さらに着ているのは兄の部屋から拝借した男物である。暑いと言う理由で短く切ってしまった髪の事もあり、彼女は傍目からは細身の美少年のように見えた。

家の鏡の前に立った時、唯はなかなかの変身ぶりに満足のいく気持ちを感じていた。しかし、男に見えるもう一つの要因である、胸の脂肪のなさ加減については虚しげなため息をついた。

（そりゃ男装するのには持って来いの体系ではあるけどさ……）

そもそも何故彼女がこのような男装をする事になったのかというと、今から行く読書同好会のメンバーによる強い要望によるところであった。

唯が腰まであった髪をばっさり切った後、唯と同じように少々妄想癖があるメンバーは元々中性的に整っていた唯の姿にある種のときめきを感じた。

それは今考えるとコスプレ的なときめきだったのだと思う。

彼女達は感じた衝動をそのまま唯にぶちまけ、次の活動の日に男装をしてくるよう熱望したのである。

あまりの勢いに唯が思わず首を縦に振ってしまったのは仕方のない事だったであろう。

目もくらむような日射を背に感じながら、唯はアスファルトの道を歩いていた。

暑い。

上からの熱射と下からの熱気でまるでサウナの中にいるような心地だ。

このままでは学校に着く前に蒸しあがってしまいそうだ。そう憂鬱に考えていた唯の視界のはしに、薄暗い森林の小道が入った。

強い日差しを木々の葉が遮り、暑い空気を地面の湿気が和らげているそこは、なんとも心地よさそうな空間だった。

丁度学校の方向に伸びている小道を見つけた唯は、あるアイデアが頭の中にいきなり現れた。

このままこの涼しげな道を行き、学校へとたどり着けないものかと。

無論普段であればこのような薄暗い小道、恐ろしくて近づきもしないが、今の唯は頭上から降り注ぐ強い陽光に辟易していた。

「ちょっとぐらいなら……危なそうなら戻ってくればいいし」

そう自分に言い聞かせるように呟いた唯は、ふらふらと足元覚束ぬ様子でその小道へと足を踏み入れた。その様子をもし、誰か第三者が見ていたのであったなら、こう表現しただろう。

『まるで、なにかに操られているようだった』と。

小道の中は想像していたよりもひんやりとして肌寒いくらいだった。後ろを振り返ると陽の光が強く降り注ぐアスファルトが見え、まるで隔絶された世界にいるような気になってしまう。

そろそろと小道を進んでいくと、何故だか日の光がどんどん少なくなっていく。

それどころか薄暗い中に見えていた木々や草花、地面の土すら暗い闇に飲まれ見えなくなった。

だがそんな暗闇の中で、自分の手はしっかりと見えている。おかしな感覚であった。

後ろをほんの少し振り向けば、遠い先に針の先のような光がぽつんとあるだけだった。まるでトンネルの中にいるかのような奇妙な感覚。

明らかに異常だ。それは唯にも理解できた。しかし――

（なんで？　どうして……？）

唯の足は止まらない。唯の意識はどこかぼんやりとし判然とせず、霧がかかったかのように不透明になっていた。この明らかにおかしい現状に気づいているのに……その先へは思考がたどり着かない。

おかしい。おかしい。頭の中では何度もその言葉が呟かれるのに――

おかしいけど……？
その先が出てこない。まるで何かに遮られるかのように思考が停止する。
まるで夢の中を歩いているかのようだと唯は思った。現実味がないこの異常に、唯はどうする事もできずただ黙々と歩く。
すると――

「……光？」

道の先に、溢れんばかりの光が見えた。
まるで光に群がる虫のようにふらふらと近寄ると、唯の身体はその光の渦に吸い込まれて行ってしまった――
あとには何も残らない。唯が通ったはずのあの小道さえも消え、道を行く人々は誰一人気づかなかった。
今日その場所で、一人の少女が森に飲まれてしまったのだという事など。

◇2

ピエロ男の名はロレス。ロレスはまた大仰な身振りを加えつつ名乗ると、唯の瞳をジッと見据えた。

「……何？」

胡乱な視線になりつつ、唯はこの上から下まで『奇妙』で出来た男から、ジリジリと離れようとした。

しかしロレスも唯と同じように――いや、唯よりも少し早いスピードで彼女に近づいてきた。

唯の鼻先から数センチの距離でロレスはようやく止まった。まるで大蛇に睨まれているような心地を感じながら、コクリと乾いた喉を唾液潤そうとする。喘ぐように苦しげに呼吸すると、ロレスはニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

「……何って言ってるだろ」

沈黙に耐え切れなくなった唯はもう一度同じ問いかけをした。

「……いや、僕は君に挨拶をして、名前も教えてあげたんだから、次は君の番かなぁって思ってね」

ロレスはゆらゆらと身体を左右に揺らしながらにこやかにそう言った。どうやら自己紹介を催促していたらしい。

「……唯」

なんとなく苗字を名乗る事が憚られ、名前だけポツリと呟いた。

「なるほどユイね！　よろしくよろしく！！」

そう言うとロレスは唯の両手を握り締め、上下にブンブンと大げさに振った。

「さて、突然だけど僕は唯にお願いがあるんだ！」

自己紹介に満足したのか、男はくるりくるりと唯の周りを舞いながら楽しげに話し出した。

「お願い……？」

初対面の人間にいったいどんなお願いがあるというのだろう。しかも、見かけからしてマトモとは到底思えぬ男のお願い……想像するだけでも嫌な予感しかしない。

「そうさお願い！　僕が君をわざわざ！　――ここ大事だよ？　わ・ざ・わ・ざ！　ここに呼んだのには理由があるんだ！　僕のお願いを聞いてもらうおうと思ったんだ！」

「だからそのお願いってなんなのって聞いてるでしょ」

若干苛立ちながら再度聞くと、ロレスは「せっかちだなぁ」とぶつくさ文句を垂れながらもまた胡散臭い笑みを浮かべた。

「お願いっていうのはねぇ～、僕の世界を救ってほしいんだ！」

「……そういうのはカウンセラーの方にお願いします」

「え？　あれ？　あ、ち、違うよ？　そんな僕の心が病気とかそんなんじゃなくてね？　本当に世界を救ってほしくて……ほら、なんて言うの？　あれ……勇者！　そう！　勇者になってほしいんだ！」

「うんうんそうだねー。自分を救ってくれる人って自分にとっては勇者みたいなもんだもんねー。わかるわかる」

「そ、そんな気の毒そうな目で僕を見ないでくれるかな！？　さっきまでの生ゴミか虫けらを見るような目はどこいっちゃったのかな！？」

なにやら慌てだすピエロ男ロレス。だがそんな姿も唯には哀れな心の病んだ男の姿に見えた。

「大丈夫大丈夫。私にできる事ならしてあげるから。何してほしいの？　世界を救うって？　友達になってあげようか？」

「なんだかものすごく失礼かつ不名誉な勘違いをされてるけど……でもやってくれるならいいかなぁ……いや良くはないけど完全に拒絶されるよりは……」

なにやらブツブツと呟いていたロレスは、急に「うん！　まぁいいか！」と言うと唯に満面の笑みを向けた。

「元々すべてが順調にいくだなんて思ってないし、多少の事には目をつぶるよ。それじゃ唯！　僕の世界を勇者になって救ってくれる？」

ロレスを可哀そうな奴と認識している唯は、その言葉に涙をこらえながら頷いた。

「うん、私なんかでよければいくらでも勇者でも友達でもなってあげるよ！」

「うん色々と言いたい事はあるけど一応（げんち）言質はとったから良しとするよ」

（なんだ言質って。なんだか雲行きが怪しくなってきたぞ……）

今更ながらに物事が望んでいない方向に進んでいる気配に気づいた唯は、ジリッと後ろに身を引いた。

「あー、そろそろ私帰るわ。学校も行かなきゃ行けないし……て、そういえばここ……どこ？」

今更……本当に今更、唯は自分がいる空間が普通でない事に気がついた。

まず地面が見えない。確かに足元にはしっかりとした土台を感じるのに、下を見ると白く濁った世界がどこまでも続いていた。

それは下だけでなく、左右上下すべての四方を覆い、そこが広いのか狭いのかすらもわからなくさせていた。

「な……に……ここ」

呆然と呟いた唯は、ハッとロレスに視線を向けた。

「なんだよここは！？　なんだってこんなところに……！？」

「はいはーい。質問は無しの方向でお願いしマース。もう契約は完了したので、そろそろお仕事に取り掛かってくださーい」

「契約？　仕事？」

契約とはさっき言っていた『言質』の事だろうか。つまり友達になる事がロレスの言う『仕事』なのだろうか。

「それじゃー唯さん頑張って僕の世界を救ってねー？　あ、救い方は君に一任しちゃうから適当によろしくー」

「は？　なにそれ？」

「とりあえずお願いを引き受けてくれた褒賞としてチート能力は付与しとくけど、それがどんな能力となるかは君しだいだからー。まぁ幸いにして想像力豊かなようだし、そこのところは問題なさそうだよね？」

「はぁ？　お前何言ってん……」

次の瞬間、唯は先ほどまでのピエロ男の前でなく、仰々しい姿をした白い髭のご老人の前に立っていた。

「……あれ？」

「おお！　勇者様！」

「……勇者？」

老人は興奮冷めやらぬ様子で唯に不躾な視線を向けていた。

無邪気な子供を連想させるその姿は、本来であれば可愛らしいと感じるのであろうが、この異様な状況にあってはそれも不気味さを

増すばかりであった。
辺りに目を向けてみればそこは先ほどまでいた場所と同じ色彩の、だが確固たる平面や奥行きのある現実であった。
白を基調としたその部屋は、大理石のような床が続き、そこには精巧な彫刻が施され、ひんやりとした空気と妙に合致していた。
部屋の観察もそこそこに、次に唯は、目の前に立つ人物達を眺め見た。
先に声をあげた老人は、唯と同じ程の背であり、おそらく１６０センチあるかないかというくらいの小柄な人物であった。
しかし、その背後に控えている人物達は皆一様に背が高く、まるで巨人と対峙しているかのような錯覚を覚える。
見ればその顔立ちは東洋のそれとは大きく異なり、ヨーロッパ系の彫りの深い造形である。
だがその髪色は唯がこれまで見た事がないような鮮やかさを誇り、原色の赤や青は勿論、紫や薄紅色の髪色をした者までいる。
明らかに、唯がこれまでもっていた常識とは齟齬（そご）のある存在であった。
グラグラと世界が揺れるような感覚が唯を襲う。
ここはどこだ？　そんな疑問が何度も唯の頭の中で生まれては消えていく。
唯の脳裏では先ほどまでのロレスの言葉がテープのように繰り返されていた。
――それじゃー唯さん頑張って僕の世界を救ってねー？　あ、救い方は君に一任しちゃうから適当によろしくー

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2917u/

魔王に召喚された勇者の話

2011年7月19日05時55分発行